あおい、あの時代を忘れない

奨励	尾島　信之〔おじま・のぶゆき〕
奨励者紹介	日本キリスト教団南大阪教会牧師

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

（コリントの信徒への手紙二　12章９―10節）

無名の同志社出身者

今年の３月、キリスト教文化センターの越川弘英先生より、お電話をいただきました。「来年度のチャペル・アワーでメッセージを担当して欲しい」というものでした。わたしがこの申し出をお引き受けしましたところ、越川先生から続けて、「実は示された日程は、同志社スピリット・ウィークで、同志社の建学の精神や歴史・人物に関する内容でお願いしている」という趣旨の説明を受けました。わたしは同志社大学神学部の卒業生で、大学院では歴史神学を専攻していて、専門が「日本の明治から昭和初期にかけてのキリスト教史」でしたので、難しいことではなく、むしろ専門分野なので全く問題ないと思い、「大丈夫ですよ」とお答えしました。

普段の同志社スピリット・ウィークと言えば、同志社を設立した新島襄やそれを手助けした山本覚馬、新島の薫陶を受け、キリスト教の牧師となり、新島亡き後の同志社での教育を支えた海老名弾正であるとか、日本の社会主義運動の先駆けとなり、後に社会民主党を結成し、国会議員として活躍した安部磯雄であるとか、また、新島のことを直接は知らなくとも、これまでの約１５０年間の歴史の中で、同志社に学び、日本のみならず、世界のあらゆるフィールドで活躍した、活躍している数多の有名人が紹介されています。

お引き受けした３月から約２ヶ月間、そういう有名人のエピソードをご紹介することに思いを傾けていました。しかしながら一方で、むしろ有名人の卒業生の方々よりも、ともすれば、同志社出身とも知られず、市井（しせい）の中で歩んで来られた方々の方が圧倒的に多いことに、ふと気が付かせられました。有名人のエピソードは多くの人々に知られていて、今までに幾度となく語り伝えられてきました。そこで本日はいつもと趣を変えて、わたしにしか語れない同志社出身者のエピソードとして、僭越ながら私自身の同志社との出会い、学び、そして、社会に出て、市井の中を歩んでいる一人としての、同志社に教えてもらったことをお話ししたいと思います。

同志社との出会い

わたしの同志社との出会いは、高校一年生の夏にさかのぼります。当時、生まれ故郷の岡山に住んでおりまして、両親がクリスチャンでしたので、わたしも日曜日は教会に連れられ、通っていました。そこの教会は、歴代の牧師が全て同志社出身の人たちでした。ある日曜日、教会に行きますと牧師が、「尾島くん、同志社大学神学部が主催する西日本献身キャンプに行ってみないか？」と声をかけられました。それまで、わたしにとって「同志社」と言えば、中学の時の社会のテストで、新島襄の「襄」の文字を漢字で書くことが出来ず、ひらがなで「じょう」と書いたら「○」ではなく「△」をもらったくらいのことでしかありませんでした。それはさておき、わたしはその時、この献身キャンプの「献身」、「身を献げる」という文字に、その意味を十分に分からないながらも、何か不穏なものを感じさせられました。

帰宅して、献身キャンプに誘われた話を両親にしましたところ、母より「信之、そのキャンプは牧師になることを希望している人が行くキャンプじゃないの？」と言われました。何か不穏なものを感じていましたが、その正体がはっきりしました。「献身キャンプに行く＝牧師になる」ということでした。わたしの家は曽祖父から続く商売をしており、父も数年後に跡を取ることが決まっていましたから、母は咄嗟に「息子が牧師になったら、跡を継げなくなる」と思ったのかもしれません。

そこで次の日曜日に、母の質問、わたしの不穏に感じた思いを、そのまま牧師にぶつけてみました。すると、「尾島くん、献身キャンプに行ったからといって、みんなが牧師になるわけではないよ」と、あっさり言われてしまいました。また、献身キャンプとは、同志社大学神学部が受験生の掘り起こしのために行なっていること、また、かつての神学部とは違って、今は神学部に進んでも、大多数が牧師にならず、普通に就職していくことを教えて下さいました。「献身キャンプに行く＝牧師になるわけではない」ことを確認し、安心したわたしは、献身キャンプに参加することにしました。

それから２年半後、わたしは同志社大学の門をくぐりました。あの献身キャンプには、結局、高校３年間毎年通い、すっかり同志社の虜になっていました。キャンプには同志社大学神学部出身の牧師や、現役の学生さんたちがスタッフとして何人も関わっておられ、私たち高校生と一緒になって体を動かして走り回り、普段学校の友人とは話さないような悩みや不安を聴いてくれました。そこで体験したことは、「わたし」という存在が肯定され、受け入れられるということでした。そして、同志社大学神学部に学んだ人たちが、生き生きとしている様子を近くで見て、「自分もあの人たちのようになりたい」という憧れの気持ちが年々大きくなり、わたしは神学部へと進むことを決意し、入学試験も無事にパスし、合格しました。

同志社に入って

入学式に行くと、同じキャンプに行った者が、あと２人いました。再会を喜びつつ、初めて行う講義登録をどうすれば良いか分からなかった私たち３人だったのですが、そのうちの一人が、「登録相談に乗ってくれる人たちがいる」というので、入学式の次の日、その一人に連れられて、ある場所へと赴きました。それが、学生聖歌隊の出店でした。当時、入学式後一週間の講義登録期間中に、田辺校地（現在の京田辺校地）には各体育会やサークルの出店が鈴なりに展開されていて、新入生向けに、体育会やサークルの宣伝活動を兼ねた登録相談が行われていました。右も左も分からない私たちに、学生聖歌隊の先輩方は一から丁寧に登録の方法、そして、お勧めの講義等を丸一日かけて教えて下さいました。

登録相談はその日一日で終わったのですが、入学したばかりで特に予定もなかったので、次の日もその次の日も、結局一週間ずっとわたしは学生聖歌隊の出店に通い続けました。大学生活を始めたばかりで、不安な心持ちでいるわたしにとってそこは、心地の良い居場所になっていました。わたしの存在を肯定して、受け入れてくれているようでした。また、大学で勉強のみならずサークル活動に携わり、学生生活を満喫している先輩方がキラキラ輝いて見えました。気が付いたら、わたしは学生聖歌隊の虜になり、一員として加えていただくことになりました。

同志社学生聖歌隊は、定期の活動として、月曜日から金曜日のお昼休みの30分間と水曜日の夕方、土曜日の午後が練習時間となっており、火曜日と水曜日のチャペル・アワーで讃美歌を歌っていました。また、不定期の活動としては、年に一度、定期演奏会が開かれ、お願いされれば、日曜日に京阪神の教会へ出掛けて行って、歌うこともありました。

あおい荘

そんな活動の合間、とりわけ、土曜日の練習の後、よく立ち寄る場所がありました。それは３人の先輩方が住んでいた一軒家でした。名前を「あおい荘」と言い、おそらくは戦前に建築された木造２階建てで、多少床が斜めになっている歴史を感じる建物でした。日曜日、わたしが京都で通うようになった教会が、その「あおい荘」から近かったので、「自分の下宿まで帰るのは面倒くさいから、今夜泊まらせて下さい」と言っては、毎週のように入り浸っていました。

入り浸っていたのは、わたしだけではありません。その建物には、学生聖歌隊の人たちを中心に、住民の友人たちである同志社大学の学生たちがひっきりなしに出入りして、様々な交流が持たれていました。芸術、哲学、宗教、政治等の話題が、時に真剣に、ほとんどの場合が良い加減に、「整然」というよりも「雑多」に繰り広げられていました。そこは「人間交差点」でした。18歳のわたしはそこで、先輩方の話に耳を傾け、時に勇気を出して稚拙ながらも自らの意見を語り、その意見に対して見解が返って来るという大変刺激的な経験をすることになりました。現在わたしは48歳になりましたが、あの時の経験によって、今の物事の考え方の礎が据えられたように思います。

先輩のお一人が事情あって転居されたことをきっかけに、わたしは「あおい荘」に転がり込みました。その後、３年間に渡って、入れ替わり立ち替わり学生聖歌隊や神学部の合計６人の人たちと共同生活をし、その他にも多くの友人となる人との出会いが与えられました。

この「あおい荘」に於いては、自分自身のありのままの姿が受け入れられていると感じていました。おそらくは、わたしと共に暮らした６人も、そして「あおい荘」に入り浸っていた友人たちも、「ここでは何でも話すことが許されている」と感じていたことでしょう。もちろん、意見の相違によって、揉めることもありました。しかし、だからと言って、誰かを排除するようなことはありませんでした。この人間交差点では、誰もが、安心して話が出来る、すっと自らの弱さを開示することが出来る、「あおい荘」はそんな居場所となっていました。

新島の言葉

同志社英学校が開校した頃、多くの学生たちが寮生活を送っていたとの資料を見たことがあります。おそらくは、私たちが「あおい荘」で繰り広げていたようなことが、開校当時から展開されていたのではないかと想像します。しかし、その居場所から、学校の運営方法について、学生たちが校長である新島へ、要望書が出されました。その要望書に対し、新島は次のように答えています。ちなみに、これは本当にあった話なのですが、２０１３年に放送されたＮＨＫ大河ドラマ『八重の桜』の中で、オダギリジョー扮する新島襄が語った言葉からです。

「・・・私が目指す学校は、学問を教えるだけでなく、心を育てる学校です。私は日本のために奉仕することが出来る、国を愛する人間を作りたくて、この学校を作りました。国とは国家のことではありません。国とはpeople、人々のことです。国を愛する心とは、自分を愛するように、目の前にいる他者を愛することだと、私は信じています。『自分自身を愛するように、なんじ隣人を愛せよ』と。型通りでなくてもいい、歩みが遅くてもいい、気骨ある者も大いに結構。良いものは良い。しかし、己のために他者を排除する者は、私は断固として許さない。・・・どうか、互いを裁くことなく、共に学んで行きましょう。」

わたしが高校時代に出会った神学部出身の牧師や学生、同志社に入ってからの学生聖歌隊の先輩方、そして、「あおい荘」で出会った人たち、これらの人々に通底するのは、この新島の言葉が時代を経て、受け継がれている証左ではないかと感じています。新島は言いました。「型通りでなくてもいい、歩みが遅くてもいい、気骨ある者も大いに結構。良いものは良い。しかし、己のために他者を排除する者は、私は断固として許さない。・・・どうか、互いを裁くことなく、共に学んで行きましょう。」

私自身、神学部を５年かけて卒業した後、悩みつつ実家の岡山に帰り、家業を継ごうとしました。しかし、それに断念し、再び神学を学び直そうと、大学院受験をしました。その際、面接で旧知の教授が、「尾島さんは戻ってくると思っていましたよ。合格されたら、また一緒に学びましょう」と声をかけて下さいました。世間一般に言われる「型通り」ではなく、遅々とした歩みのわたしを頭ごなしに叱るのではなく、共に歩む道を開き、わたしを受け入れて下さいました。

私たちは強くありません。弱さを抱えています。悩みや不安を抱えています。お隣さんと比べた時に、自らの知識の足りなさを感じる時があるかも知れません。その時に、強い者が弱い者を裁いたり、排除してはならないのです。型通りには歩めない者も、歩みが遅い者も、気骨ある者も、どのような立場にある者であっても、自らの弱さを認めつつ、共に学んで行く、それが同志社スピリットではないでしょうか？

２０２３年５月17日　同志社スピリット・ウィーク春学期

今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録